

圧倒的多数の若い人は、「自分にはこれからも十分な時間があるから、自分の思い描いた理想の人生を歩みたい」と考えていると思います。

でも、こういう考えが高じると、「未来のために今を我慢する」ことばできても、「**今を心から楽しむこと**」がなかなかできなくなります。

何かしようとする度に、「将来のため」、「老後のため」といった言葉に、邪魔をされたことがあるんじゃないでしょうか。

T細胞に関しては、ほかにも「無駄」と言える部分があります。具体的には、はしかの抗原をやっつけるT細胞が存在しますが、今は生涯、はしかの抗原とは無縁の人もかなりいます。そうなるとそのT細胞は生涯、その人の体の中でブラブラと、ほっつき回っているだけで終わってしまう（笑）。

では、そういう無駄を一切排除して、ギチギチのところで生物が存在できるかといったら、答えはNOです。

そういった生物の世界に見られる「システム」に照らしてみても、「とにかく**最短距離で（＝無駄をしないで）目的に達するのが勝ち**」といった、巷で聞かれる昨今の価値観には疑問符が付きまますね。

ことに若い人たちは、仕事の出来不出来を「楽しい」というキーワードで語り過ぎているように思う。でも仕事って、結局は「結果がすべて」なのだということを忘れてはいけません。

「人はみな平等である」という言葉の真の意味はすべての人間の能力や生まれが平等ということではなく、「行動によって生まれた結果」が平等に扱われるということです。

実社会では、「心根」などどーでもよくて、何事においても、評価の対象は「**結果**」です。だからこそ世の中は「フェア」であり、「残酷」なのです。

昨今は、こういった“あたりまえで本当のこと”が、以前にも増して語られなくなった印象があります。その反動かどうかはわかりませんが、「**楽しい・感動**」といった**ものが過剰に叫ばれている**気がしますね。

「人間のあるべき姿」として、道徳とか倫理を説く人は昔からいっぱいいました。仮にみんながそんな生き方をしていれば、世界は平和になるんですけど、そうなったためしは一度もない。ということは、結局人間は「心根」ではなく「結果」で生きてるってことなんです。**すべては行動と、それに伴う結果だけ**です。

「過去との決別」という点で言えば、熟慮の末の転職だったものの、実際にその会社に移ってみたら、思っていたほど良くなかったという例は、よくありますよね。でも、だからといって、過去を振り返ってクヨクヨしたら、その後の人生が暗くなってしまいます。

リストラもそれと一緒に。繰り返しますが、年収が下がったら下がったで、その下がった年収で**どうやっていくかに思考のベクトルを集中**させるべきです。昨年の年収と比較して落ち込んでみても、何もいいことはありませんよ。

給料もこれから増えていくかどうかわからない、これから人生どうなるかわからないってときに、自分の人生を縛り付ける「**四十年ローン**」みたいなことをして、**マイホームを無理して買うなんて、アホらしい**です。会社はいつ潰れるかわからないし、変な上司が上について、ノイローゼになるかもしれないし。

大学院の学生定員がこれほど増加したのは大学の生き残り戦略という面が大きかったと思われます。

大学院がない大学よりも、ある大学の方が格上だとの幻想を大学の教師が抱き、**大学院がないと生き残れない**と思い込んだというのがまず第一点。次に世間がこの幻想を共有し、大学卒よりも大学院卒の方がエライのだと思い込んだのが第二点。それを真に受けた若者が能力もないのに大学院に進学したことが第三点。学部生が減った分、大学院生を増やして、大学の生き残りを図ったわけです。

もちろん一番悪いのは出口（就職先）もないのに、人口（入学定員）ばかり増やした文部科学省ですけどね。要するに**高学歴ワーキングプアは国に騙された**わけです。今また、**法科大学院に入学した学生たちの大半は法曹になれなくて国に騙され**つつあります。どちらにせよ、国の政策などを信用するのはバカなのです。国が右といったら左、左といったら右を考えるのが大局的に見ると正しいのです。

例えば、政府自民党は、**預金金利を安くして、さらに一千万円以上の預金は銀行が倒産したら保障しないと決めて、国民の資産を株や投資信託に誘導**しました。周知のように、騙されて株を買った人はリーマン・ブラザーズの倒産に端を発する金融危機によって大損したわけです。一番打撃を受けなかったのは、ほとんどゼロの金利にもかかわらず、貯金をしていた人です。くれぐれも国の政策は信じないように。

「趣味」を持つ際、パチンコや競馬といった手軽なものよりも、いわゆる**“修練”**を要するものにチャレンジし、時をかけて自分の実力を高めていく道を選んだ方が楽しいと思います。そして、ある程度の実力に達したら、同じ趣味を持つ人の会合に積極的に参加し、自分の実力をアピールしてください。

そうすれば、そこで得られる評価がまた、その人をモチベートし、趣味の実力を向上させる好循環が生まれます。同じ趣味仲間の中で技術や知識の競争をすれば、いい意味での「緊張感」が生まれ、趣味がますます楽しくなります。

私は、「**仕事を通じた自己実現**」を万人に求める風潮が続く限り、**大多数の日本人は幸せにはなれない**と見ています。

すでに社会問題化して久しい「フリーターの増加」にも、「仕事を通じた自己実現」という、偽りの価値観によって、多くの若者が**“強迫、されている側面がある**ように感ぜられます。つまり「自己実現できない仕事を選ぶのは格好悪い」ということで、大勢の若者が出口のない**“自分探しの森”**へと足を踏み入れてしまっているのです。

私は、仕事なんて単なるお力ネ儲けの手段でしかなくても、ちっとも構わないと思っています。

蛇足ながら、虫の楽しみは三つあって、①採る、②集める、③見る、です。若い内は①、中年は②、老人は③と楽しみが徐々に変化していきます。

同じような虫の間の微妙な差異を見いだすのが**“見る、楽しみ**です。普通の人には何のことかわからないでしょうけどね。

ともあれ、ある程度魅力的な男女であれば、結婚後も、連れ合い以外の異性から好意を持たれることは、一度や二度はあるでしょう——そこで問われるのが、その人の人間性なのです。好きなだけ遊んで、飽きたら捨てちゃう輩もいますが、別れ際を上手くしないと後でやっかいなことになります。不倫をするのは簡単だと思いますが、痕跡を残さず不倫を消すのは至難の業です。ゆえに、妻や夫以外の異性から余りモテるのは不幸なことだと思います。

男性にも女性にも、異性を夢中にさせる力に長けているタイプがいて、大学で教えていると、そういう学生はすぐわかりますね。ただ、ものすごくモテる学生が幸せになれるかという、それはまた別の問題なのです。

でも他人の悪い部分というのは、実は**“自分とは合わない部分”**に過ぎないことがほとんどです。だから、その部分を**自分の価値観に合わせて変えてやろう**などと思っ**てはいけません**。第一、いい大人になれば、当の本人が自分の欠点を自覚しており、それをわざわざ他人から指摘されたりすると、カチンとくるだけだからです。読者の

みなさんだって、そうでしょ？

従って、友人との仕事や食事や遊びの最中に、その友人の気に入らない部分がむくむく頭をもたげてきたら、「ああ、始まったな」と心の中で呟いて、適当にあしらったらどうでしょうか。

子供は親のことを、そんなに心配してはいないということ。例えば、どこかのお父さんが「実はオレ、癌になっちゃって」と子供に告白したとしても、その子供は「ま、もう七十歳だし、しょうがない」などと大して心配しませんよ（笑）。

私の場合、宗教を全く信じていないこともあり、少なくとも現時点では「死」は怖いですね。その恐がり方なのですが、これが不思議なもので、「健康」な時ほど怖いのですね。

私より上の世代の知人で、心臓病や脳梗塞などで、生死の淵を彷徨った人が何人かいますが、彼らが異口同音に口にしたのは、「倒れて病院に運ばれている最中は、その時の状況を冷静に分析している自分がいる」ということ。要は、「ああ、ヤバいなあ……、ヘタすりやこのまま死んでいくのかも」と心の中で思っていたとしても、「その時は、そのまま死んでいくことが怖くなかった」そうです。

でも、一命を取り留めて日常の生活に復帰したとたん、「死んで無になることが怖くなる」と、みなさん指摘しますね。

思うに、「死」に対する純粋な恐怖というのは、「健康人」の特権なのではないでしょうか。つまり、末期癌などの不治の病を患って、体のあちこちに激痛が走るような、死が目の前の段階になった人はたぶん、死ぬことはそんなに怖くないはずで、今の身体的苦痛から解放されたいという気持ちの方が大きくなっているはずだからです。